



Book Talk

編集・発行 海南高校図書館
第10号 2011. 08. 30.

愛読書について語り合うのは楽しい。本校図書部の方でも「Book Talk」を出して下さっているが、これは書いている先生方と読んでいる生徒たちと、どちらがより楽しんでいるのだろうかと思う。多分どちらも大いに楽しんでいるのだろう。

前任校の LHR で、「愛読書を語る」というのをやってみた。短編小説・長編小説・詩・ノンフィクション・マンガなどのジャンルごとに愛読書をピックアップし、タイトルや作者と、どんな内容かどこが気に入っているのかを書いた「愛読書リスト」を作ってもらった。それからペアになってそれを見せながら語り合うという企画だ。そして最後にみんなの愛読書リストを後ろの掲示板に貼った。見本として自分自身の愛読書リストを作ったが、これが結構楽しかった。

この時、長編小説のジャンルで愛読書として挙げたのが、マーガレット・ミッチェル作『風と共に去りぬ』。アメリカ南部を舞台に、南北戦争とその後の時代をたくましく生き抜いた女性スカーレット・オハラ物語だ。強い意志でどんな困難も乗り越えていくスカーレットが、何ともかっこよく見えた。中学2年の時初めて読んで以来、何度も読み返した。おかげで南北戦争が1861年に始まり1865年に終わったことも、1863年、激戦地ゲティスバーグでリンカーンがあの有名な“the government of the people, by the people, for the people”というフレーズを含む演説を行ったことも、苦勞して憶えなくても自然に頭の中に入っている。



この小説は映画化され、大ヒットとなった。「スカーレット・オハラは美人ではなかったが……」というのが小説の冒頭だが、演じたのは美人女優のヴィヴィアン・リー。当初、主演女優選びが難航し、決まらないまま撮影が始まったそうだ。たまたまそのスタジオに、ヴィヴィアン・リーが見学に来ていた。アトランタ炎上のセットの前に立ったヴィヴィアン・リーに、セルズニック監督は「君こそスカーレットだ！」と叫んだとか。それに対し、相手役であるレット・バトラーをクラーク・ゲーブルが演じるというのは、すんなり決まったらしい。作者のマーガレット・ミッチェルは彼のファンで、「レット・バトラーは、あの俳優を思い浮かべながら書きました。」と後にコメントしている。

小説も長い、映画も前篇・後篇に分かれていてとても長い。今であれば、『ハリー・ポッター』や『ロード・オブ・ザ・リング』のように、シリーズにして少しずつ上映されているかもしれない。私は大学生の時、難波の映画館で初めてこの映画を観た。大入り

満員で空席がなく、2階の階段の一番上に腰かけて観たのを憶えている。前篇・後篇一気に上映しているこの映画を、階段に腰かけて……若いからできたのだろうか。いやいや、それほどこの映画を観たかったのだ。今の時代、映画館は全席座席指定になっているから、こんな事にはならないだろうけれど……

何年か前の LHR の時間、このビデオの



鑑賞をしたことがある。これは生徒たちに好評で、中でも前編のラストシーンに感動して涙が止まらない女の子がいた。戦争が終わった後、主人公スカーレットが自分の家の荒れはてた農場で右手の拳を上げて“I'll never be hungry again.”と誓う場面だ。BGMに「タラのテーマ」が流れ、それが感動をより大きくする。

また、私の好きな場面の一つに、スカーレットがアシュレ・ウィルクスにふられ、花瓶を壁にぶつけるところがある。スカーレットは失恋するわけだが、何故かこれが痛快だ。失恋だろうが敗戦だろうが、どんな事にも逃げずに立ち向かっていく、その強さが彼女の魅力だ。しかし、男性に言わせると、「こんな気の強い女、ちょっとかなわんなあ。」とあまり受けが良くない。小説家の田辺聖子さんが、「女性の多くはスカーレット・オハラが好きだが、男性にはあまり好まれない。それはスカーレット・オハラが“女”そのものだからだ。」

という意味の事を書いているのを、読んだことがある。

物語の中には、園遊会の料理やスカーレット・オハラとレット・バトラーが新婚旅行に行き、食べるクレオール料理が出てくる。また、当時若い女性の人前であまり食べてはいけないと言われていて、パーティーの前にハムやパンケーキを食べておく場面もあって、興味深い。パーティーに着て行くドレスを選ぶ場面も楽しい。作者が女性なので、こういった所の描写が細やかだ。

さて、これまで枝葉の部分を書く多く書いてきたが、実はこの物語の中心は、スカーレット・オハラの恋愛である。初恋の人アシュレ・ウィルクスに変わらぬ想いを抱きつつも、やがて最後にレット・バトラーへの愛に気づくというストーリーになっている。作者のマーガレット・ミッチェルが美人なので、「これは自分の経験を踏まえて書いたのかなあ。」といった想像がつついてしまう。それにしても、恋愛小説でありながら、一人の女性の成長の物語、そして南北戦争を背景にした歴史小説といった要素も持っている、『風と共に去りぬ』とは誠にスケールの大きな小説なのである。

(梅村香世子)

■編集部より ■図書館所蔵の『世界名作シネマ全集 1～不滅のハリウッド超大作』でこの映画をご覧いただけます。小説とあわせてお楽しみください。なお、バックナンバーは海南高校のホームページからカラー版でご覧いただけます。

わたしの愛読書

梅村先生（英語科）、熱く語る

